



日本女性会議

2015 倉敷

日本女性会議2015 倉敷

思いやり 男女(ひと)が集う 白壁のまち
～ライフステージとそれぞれの男女共同参画～

報告書

REPORT





日本女性会議
2015 倉敷

分科会3

子育て

●日時/10月10日[土] 9:30~11:30 ●会場/倉敷市芸文館 アイシアター

地域で育む子育て環境 ～すべての子ども みんなで支え見守ろう～

分科会3

●パネルディスカッション

コーディネーター
八重樫 牧子
福山市立大学 教授

パネリスト
幸重 忠孝
幸重社会福祉士事務所 代表

三好 年江
新見公立短期大学 助教

岩城 弘三
倉敷市立郷内中学校 教員



コーディネーター
八重樫 牧子

八重樫 最初に開催趣旨を説明いたします。地域で子育てを支え、子どもが安心して暮らせる社会にするために、私たちには何が必要なのかを皆さんと一緒に考えたいと思い、この会を開催させていただきました。

昨年8月に「子ども・子育て関連三法」が成立し、今年4月から「地域子ども・子育て支援事業」が市町村事業として位置づけられ、今、計画的に進められているところです。これらの事業は、主に就学前の子どもや子育て家庭の中でも、特に母親を中心に展開されているように思います。このような支援はとても大切なことですが、今回は、もう少し視野を広げて考えてみたいと思います。

そこで、まず、岩城さんは、父親の立場から育児休業を取られていましたので、その体験をお話いただこうと

思います。それから、新見公立短期大学で子育て支援をされている三好さんにお話いただきたいのは、特に就学前の子どもを持つ子育て家庭への支援の取り組みです。そして、幸重さんは、長年地域において、生活にしんどさを抱えた子どもたちの居場所づくりをされていますので、その報告をお願いします。

父親が育児休業を取得するメリット



パネリスト
岩城 弘三

岩城 私は中学校の教員をしています。今から9年ほど前に1年間の育児休業を取得しました。その時の体験談を話そうと思います。まず、我が家の家族構成は、私と妻。子ども3人は、上から男、女、女で、3番目の娘が生まれた後、2006年4月1日から翌年3月31日までの1年間、

思いやり 男女(ひと)が集う 白壁のまち ～ライフステージとそれぞれの男女共同参画～

育児休業を取ったわけです。その娘が生まれたのは、2005年11月でした。その後、2006年3月31日までは、妻が産後の休暇と合わせて育児休業を取得していたのです。そして、次の4月1日から、年度の切れ目で私がバトンタッチするという形で育休を交代しました。妻も教員をしているので、年度で交代する方が取りやすかったのです。今では「イクメン」という言葉も一般的に言われるようになりましたが、当時はまだありませんでした。振り返ってみると、私もイクメンの一人で、今もその気持ちは変わらずにいます。

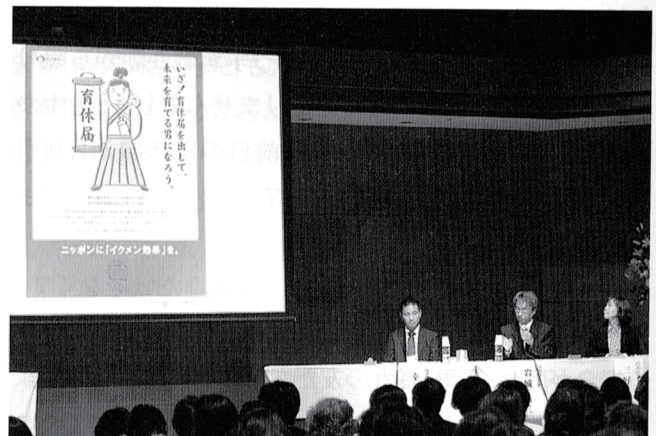
育児休業を取得するにあたっての経緯をお話しましょう。きっかけは、「育休取って見たら？」という妻からの提案でした。3番目の子の妊娠が分かった時に、妻から、「上の子二人は、私が育休を取って育休生活を堪能したから、今度はお父さんが取って見たら？」というようなことを言われたのです。

それまでの私は、自分が育休を取るということなど、考えてもみませんでした。妻からの話にも、最初は、「今は父親でも取ることもできるんだ。それもいいかな」といった程度に受け止めていたのです。ところが月日が経つにつれて、「そうだな、ちょっと取ってみようか」と、気持ちが変わっていきました。3番目の子が育児に関わる最後の機会だと思ったので、ちょっと大げさですが、私の気持ちの中に、「子育てのまとめがしたい」という思いが生まれたのです。上の子二人の場合は、オムツを交換し、ミルクも作って飲ませ、夜泣きをする時は抱っこして落ち着くまで守りをする等、私にできることはしてきたつもりでしたが、妻が主導の子育てでした。上の子二人を振り返ってみた時に、自分の知らないうちに、「もうハイハイできるんだ」「もうつかまり立ちできるようになっているな」「ゴニョゴニョしか言ってなかったのに、いろんな言葉が出てきているな」などと、子どもはどんどん成長していくという思いがありました。そこで、3番目の子は、私がそばにいて、その成長を間近に見たい。また、「寝返りが打てた日は今日だ」「今日は、この単語が初めてしゃべれた」というのを、自分で見届けたいという思いもありました。こうして、「子育てのまとめがしたい」という思い、育児休業を取ろうという気持ちが固まっていったのです。

そうすると、次は職場です。当時の校長に、「育児休業を取りたい」と言いに行きたいのですが、何と言ったらいいかを随分悩みました。どうにか意を決して言いに行った訳ですが、ここで、「もっとよく考えてみたらどうかね」とか「いやいや、制度上は取れるけれど、どうだろうね」と反対されたら、私の気持ちがグラついたかもしれません。ところが、校長は「それはいいかもね。学校の現場を離れて1年間過ごすというのが、我が子のためだけでなく、この先、君の教員人生においても貴重な経験になるんじゃないの」と応援してくれたんです。これが今で言う、「イクボス」ですね。本当にありがたかったです。

ということで、育児休業がスタートしましたが、周囲の反応としては、大きく分けて二つの言葉がありました。

一つは、「育児休業を取っているんですか、いや本当ですか、すごいな」と言って褒めてくれるものです。でも、立派だ、偉いと褒められても、私はいつも恐縮していました。そんな大したことはしていないのです。家事や育児、料理が上手なわけでもありません。ごく普通の父親が、仕事を休んで子どもの面倒を見ているだけ。それだけで、「すごいですね」と褒めてもらえるんです。「育休を1年間取っているんでしょ。1年もよく取れましたね」と言われますが、そうではありません。1年間、休みを取っていますが、私が一人で子どもを見ているのは、朝、妻が仕事に行き、夕方に帰って来るまでの間だけです。妻が帰ってきたら、一緒に面倒を見れます。1日24時間、365日、すべて一人で育児に携わってきたわけじゃありませんから、「誰でもできるんですよ」と言って回りました。



もう一つは、「育休取れたんですか。いいですね、取ってみたいな」という反応です。そんなお父さん方、9年前で

も、「取れるものなら取ってみたい」と思っている方が大勢いました。だけど、制度がない。あっても、事実上、それが使えるような環境が整っておらず、収入も減ってしまう。復帰した後に「仕事に支障が出ないのだろうか」という悩みがある。そんな理由で、実際のところは育児に意欲は持っていても、育児休業が取れないという方を大勢見かけたのです。

あれから9年経って、世の中もだいぶ変わってきているように感じます。先日、ネットで調べてみると、父親が育休を取ることがすごく注目され、いろんな職業の方に出てきています。残念ながら、私の周りではあまり変わっていないようですが……。

育休中、外出する際は、おんぶするか、前向きに抱っこして歩いていました。ベビーカーもあったのですが、こちらの方が密着するし、様子もよく分かるんです。離乳食も、作って食べさせました。昔は、離乳食は何か特別なものを、それだけに用意しないといけなかったと思っていましたが、上の子2人の経験から何でも食べさせられるのが分かっていたので、大人の食べるものを柔らかく煮たり、細かく切ったり、すり潰したり、「何でもあり」という感覚で食べさせていました。

私にとって、育休取得は、良かったことだらけです。その中から五つほど紹介します。まず、平日の街の様子が分かったこと。家庭と職場ばかりを往復していた私にとって、平日はどんな人が、どこで何をしているかということがよく分かりました。また、専業主婦の方の行動パターンも見られて良かったです。特に印象に残っているのは、朝のスーパーマーケットで、開店前に並ぶ光景です。自動ドアが開くと同時に、肉の売り場にダッシュします。そこで、半額シールのついた肉を適当にパパッと取るわけです。ちょっと離れたところで品定めをして、「これは必要、これは返そう」と、そういう争奪戦が朝から繰り広げられるということを私は知りませんでした。途中から混じってやってみましたが、前日の閉店時に2割引だった肉が、次の日は半額になっているんですね。勉強させられました。

続いて、人間関係が広がったこと。職場だけでなく、近所の人や、挨拶するだけだった方ともゆっくり話をする機会が取れ、長男、長女の友だちとも大変仲良くなりました。子連れで出かけていくと、みんなが話しかけてくれるので、人間関係が広がるんです。

また、子連れの父親には、皆さんが親切にしてくれま

す。声掛けしてくれたり、道を譲ってくれたり、すごく気遣ってくれるんです。娘を抱っこしてスーパーのレジに並んでいると、係の方が品物を袋に入れてくれたりします。これは、ありがたかったですね。

そして、料理の腕が上がったこともそうです。それまで、自炊もろくにしたことなかった私が、この育休生活で、腕が上がったというか、正確には『できるようになった』ということです。これは、大変良かった。もし老後に、一人になっても生きていけると思いました。

最後は、何より子どもと過ごす時間がしっかり取れたこと。これに尽きると思います。私から父親の皆さんへのメッセージは、「育児休業を取ってみませんか?」「勇気を出して取ってみてください」「絶対いいです。私が保証します」。子育ての選択肢に、父親の育児休業をぜひ入れてもらいたいと思います。厚生労働省の「イクメンプロジェクト」のポスターには、「いざ、育児届を出して、未来を育てる男になろう」とあります。私も同じ気持ちです。

にいま子育てカレッジの取り組み



パネリスト
三好 年江

三好 新見公立短大の三好と申します。まずは、自己紹介からさせていただきます。私は学校を卒業し、保育士として5年ほど働きました。その後、結婚を機に(遠くから越してきたので)仕事を辞め、しばらく家庭にいた期間があります。それから職場復帰し、幼稚園の教諭を3年、その

後、今の保育士養成校が非常勤も含めて15年ほどです。典型的な「M字曲線」ですね。一旦、社会に出て労働力になり、それから家庭に入って子育てをした後に、再就職、再出発をしていったわけです。

その頃は「育児不安」という言葉がまだ一般的でなく、「何かイライラするなあ」「不安だな」「何でこんな気持ちになるのかなあ、子育てしていて子どもはかわいいし、楽しいはずなのに」と、子育て中に思っていました。自分が子育てしていた頃と、今の子育て支援の領域で勉強をしていく中で繋がっていくことがたくさんあります。また、私の勤務先は、保育者養成校です。将来、保育士や子育て支援者になっていく学生の教育にもあたっていますから、その取り組みをお伝えしたいと思います。

ご紹介するのは「にいま子育てカレッジ」、大学・行政・地域が繋がって親子に寄り添う、地域協働型の子育て支援です。地域ぐるみで子育てをしていこうという取り組

みですが、拠点となるのは大学ですから、大学が有する様々な資源、施設を活かせます。これから保育者になっていく学生も含めた大学の知の財産を活用しながら、地域の人たち、行政等も含めた話し合いを繰り返す中で事業を打ち立て、みんなでやっていきましょうというものです。もちろん、子育て中の方にも入ってもらい、地域の子育ての力を向上させていこうとしています。

この「子育てカレッジ」は、今、岡山県内で広がりを見せています。去年10月の時点で、県下に14カレッジが立ち上がり、各地域で活動しているわけですが、第1号は私たちの新見です。平成19年に、備中県民局の方から、「大学の資源を生かして、子育ての支援をやってみないか」と話が持ちかけられました。その時は、大学でも学生の子育て支援力の向上、親子を理解して寄り添う保育者を育てるための実践の場が欲しいと考えていたので、相思相愛の形で始まったのです。準備期間中の平成19年は、協働ミーティングというやり方で話し合いを繰り返しました。様々な機関の人たちが、「この地域に必要なことは何だろう」「今、この地域に暮らす親子の実態はどうだろう」といった話し合いを繰り返し、平成20年に、「にいみ子育てカレッジ」を立ち上げたのです。



今年で丸7年を迎えますが、その構成は、まず、年4回ほど委員会を開く運営協議会、月に1回の話し合いを行っていく事務局会議、そして、「この1年の取り組みはどうだったのか」「どういう成果が上がっているか」ということを、当事者と子育て中の方にも入ってもらって評価していく評価委員会からなります。

「にいみ子育てカレッジ」は、こうした組織を構成しながら、主に六つの事業に取り組んできました。中でも、その目玉になっているのが、平成21年から始まった、親子交流ひろば『にこたん』です。これは、大学の中に設けた親子で自由に過ごしていただく広場で、最初は「週2日だけ

来てください、自由に使ってください」と言っていたものが、現在では月曜日を除く週5日開設しています。今日は主に、広場のことと、将来の子育て支援者である学生がどういうふうに関わっているのかということと話したいと思います。

これが、大学の中に開設している広場です。



初めからこういう広場ができていたわけではありません。最初は、小さな研修室でやっていました。その後、利用者たちから、「なくてはならない場だ」という声が上がリ、いろいろな予算がついて、立派な施設になっていきました。今では、1日50名ほどの方が利用しています。

この「にこたん」は、いろんな人、いろんなモノやコトが会合していく場です。繋がって、学び、育ち合っていく、そういう交流の場になっています。また、お父さんを巻き込めたらという思いで、土曜日も開設することにしました。10時から16時まで、「いつ来てもいい、いつ帰ってもいい、自由に過ごして」という場です。

もう一つ、この広場の大きな特徴は、スタッフがいることです。保育士等の資格を持つスタッフ3名が常駐して、見守ったり、交流を促進したり、人と人を繋げたり、子どもと子どもを繋げたり、環境づくりなどをやっています。一方、幼い子どもたちが、お姉ちゃんやお兄ちゃんを真似て、いろんなことができるようになったり、お姉ちゃんやお兄ちゃんが小さい子を労わるようになったりという、素敵な交流がたくさん見られます。0歳児も、友だちがいて、とても楽しそうに遊ぶという発見もありました。動きが活発になって、いろんなことに興味をもつのです。

この施設で、一番願っていたのは、外遊びができる環境でした。その必要性に理解を示していただき、新見市の方で庭を作っていただき、天気の良い日は、夏なら水遊びなど、外遊びができるようになりました。もちろん、

子どもたちのお父さん、お母さんたちも、ネットを買って植物を育て、日陰を作ってくれるなど、色々と考えてくれています。

利用するだけでなく、親が力を発揮してくれるのです。園庭の遊具作りで力を発揮してくれたお父さんたちもいました。それから、いつもと違う遊びをということで、「ここを池にしてみよう」と、ザリガニや魚を持ってきた、砂場を池にして遊んだこともあります。お父さんも、一緒になって夢中で遊ぶのです。これが、子どもたちにとっても魅力的で、「お父さんすごい、パパかっていい」、お母さんから「こんな顔を見たことない」という声もあり、非常に良い取り組みになっていると感じています。他にも、絵本読みをしてくれたお父さん、手芸が好きなおばあちゃんに教えてもらったと、「チューリップハット」を作ってくれたお母さん、柏餅の作り方をみんなに教えてくれた、栄養士の経験があるお母さんなど、それぞれの得意なことで参画してくれるのです。さらに、自分たちで子どもの環境を考えていきたいというママたちがグループになって、バザーの開催で資金を得て、「にこたん」の環境づくりや活動に活かすということも長く実践してくれています。

先ほど、岩城さんの話の中で、「子どもはすごい力を持っている」とありましたように、子どもがパパやママ、いろんな人を繋げていくことで、様々な交流が生まれているのです。ここではゆったりと時間が流れて、自由に過ごせるので、改めて親子が出会う、かわいさを発見する、向き合うという時間が生まれています。また、いろんな年代の方がいらっしゃるので、子育てを学ぶ場にもなっているのです。

地域の様々な人との交流もあります。専門機関の保健師さん、消防士さんには、広場に来ていただいて交流しました。逆に、地域の公民館の方との交流は、出て行って、おじいちゃん、おばあちゃんの力を借りる活動等ができています。これによって、地域の中に親子で出ていきやすくなり、地域のお祭りにも参加する姿が見られるようになりました。

また、大学の外に出ていく取り組みも行っています。例えば、大学から20km以上離れた山村地域で場を作り、三世代が交流するという事業をやりました。他にも、商店街にも出て行って、一般の人に知っていただくということも行っています。

一方で、学生の側にも、得るものは少なくありません。

大学の中に広場があることで、子どもたちや、そのお父さん・お母さん方を見る機会が日常的にあるわけです。広場はガラス張りになっているので、通りすがりに覗いたり、広場の中に入ったり、一緒に食事をするということもあるわけです。例えば、子どもに触れたことがないという学生もいます。授業で、「先生、赤ちゃんの抱き方が分からないんだけど、どうするの?」ということがありますが、そんな時、「じゃあ、『にこたん』に行っておいでよ。赤ちゃんがいるから抱かせてもらえと思うよ」「じゃあ、行ってくる」というふうに、すぐに実践できるのです。

学生スタッフ活動というものも行っています。これは、「スタッフの立場で子育て支援を考えていきたい」という学生がスタッフになって、ミーティングなどを一緒に行なっていくものです。これを通して、スタッフがどういふところに心を配っているかなど、現場でのリアルな感覚を学んでいくことができます。

このように、「にこたん子育てカレッジ」は、学生や地域の様々な人を巻き込み、ネットワークを広げながら、子ども、親、地域等がともに育つ子育て支援に取り組んでいるのです。

地域の中での子どもの居場所づくり



パネリスト
幸重 忠孝

幸重 生きづらさを抱える子どもたちや家庭を、地域でどう支えていくのかということで、京都の『山科醍醐こどものひろば』という民間団体で始めた取り組み、滋賀県で行っている取り組みについて、話をさせていただきます。私は岡山の出身ですので、「地元に戻ってきたなあ」と思いながら、今日も寄せてもらいました。

私は、プロフィールのとおり、児童福祉施設の仕事をしてから大学の教員になって、今は地域に、社会福祉士事務所を立ちあげ、いろんな取り組みを行っています。

今朝の新聞で、いじめや子どもの貧困のことが大きく特集されていました。先ほど、発表のありました、お二方の明るい話も非常に素晴らしかったのですが、一方で、しんどい家庭やしんどい家庭で育つ子どもたちというのは、日本の社会の中で、今、見捨てておけない状態になっていることも事実です。先日、子どもの虐待についても発表されました。8万件を超える子どもたちが虐待を受けています。そして、私が働いていたような施設で生活する子どもたちは、戦後からほぼ変わらずに4万人いて、家庭

でなく施設で生活をしているわけです。

様々な福祉の団体が、あまりスポットの当たらない、そういう子どもたちや家庭のために一生懸命頑張ってきた歴史があります。今日の分科会7で話をされる生田さんという方は、私の大先輩で、西成ですっと取り組んできた方です。一方で、先ほど話が合ったような明るい子育てといたら変なんですけど、一生懸命されている子育ての部分と、一緒に語ってられませんでした。そこで私自身は、それらをうまく引っ付けるような取り組みをしているということで、今日はお話をさせてもらいます。

京都の山科醍醐こどものひろばは、親子劇場、子ども劇場という会でした。1960年に福岡で立ち上がり、主婦と若い大学生が中心になって、子どもの文化活動をもっと良くしようということで始まった運動です。1990年頃まで、日本全国にすごい勢いで広がり、バブル崩壊とともに活動自体も縮小していきました。そして、NPO法人という団体になった時に、「こどものひろば」という名前に変わりました。京都では、現在、山科醍醐にある私たちの「こどものひろば」と、もう一つのところを除いて活動を終えています。

その団体では、子育て支援であったりとか、子どもの健全育成のために子どもたちを連れてキャンプに行くなど、いろんな文化活動をやっていました。しかし、私は仕事で児童福祉施設職員や、学校で福祉の相談を受けるスクールソーシャルワーカーをしていたのですが、そこで出会う子どもたちの置かれた状況は、真逆の世界です。でも本当は、しんどい家庭の子どもたちこそ、文化活動や「子育てカレッジ」のような素晴らしい取り組みの中で色々体験させたいのです。でも、しんどい家庭の人たちは、毎日の暮らしがいっぱいいっぱい、その場に来られない。子育て支援の活動というのは、そこに連れていく親がいないと、子どもだけで来ることはできないんです。親の仕事が忙しくて、子どもたちは参加できないという実態があります。

その中で、何とか入口を設ける活動として始めたのが、商店街の空き店舗を使った、子どもの夜の居場所づくりです。「トワイライトステイ」「通学合宿」という取り組みになります。特別にすごいことをやっているわけではありません。17時から21時まで、子どもたちが、本来なら家でゆっくり過ごすように、ここで過ごせるようにしています。だから、決まったプログラムは、あってないような感じです。また、学童保育とはちょっと違います。子ど

もたちは2、3人位で、そこにボランティアの学生さんや地域のおっちゃん、おばちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんが集まり、10人にも満たないようなところで1グループを作っているのです。なぜ少人数かというと、それが家庭的だからです。施設や学童保育のように、20、30人の子どもが来るのは賑やかで楽しいのですが、家庭的とは言えません。家庭的なものが充足していない子どもたち、夜、独りぼっちで過ごしている子どもたちには、そうせざるを得ない理由が、その親にあるのです。つまり、夜遅くまで仕事をしているとか、病気を抱えていたり障害をもっていて満足に子育てできないとか、いろんな親がいます。そういう子どもたちは、家で夜、一人で寂しい思いをしているんです。日中は保育園、小学校や中学校に行って元気に過ごせるんですが、家に帰ったら、この現実の中で過ごさないといけません。日中は、彼らを見守る活動がいっぱいあるんですが、夜に何かしてくれるところは少ないんです。ですから、夜にそういう子どもたちを呼んで、ご飯を食べたり、工作をしたりして本当に楽しく過ごしています。

ここでは、子どもたちに必ずご飯を提供します。皆さんは、食卓を囲んで食べるご飯が当たり前だと思っているかもしれませんが、生まれてずっと独りぼっちのご飯しか食べていない子は、地域の中にいっぱいいるんです。みんなで作ったご飯や温かいご飯を食べたことがなくて、いつもコンビニやファミレス、冷凍食品のご飯という子が、外から見えないだけで結構います。こういう子どもたちと食卓を囲んでワイワイやったり、実際にご飯作りをするといった取り組みもしています。

次に、通学合宿についてお話します。夜の居場所では、関係機関と繋がってやるのがなかなか難しかったんです。こういうことを地域の方が始めたといっても、専門家の人たちは、「素人がこんな大変な家庭を見られるの?」と言って、なかなか繋いでくれません。でも、子どもたちは活動の場に来たら楽しくやっているんです。そういうことがなかなか伝わらないので、「どうしようかな」と思って考えたのが、通学合宿です。それは、あるしんどい地域で行った取り組みです。その地域は、「トワイライトステイ」が21時で終わって、子どもを家に帰したくても、親はまだ帰っていない家庭がザラにある地域なのです。子どもの貧困率は、全国で16.3%。気付かないだけで、今はそういう社会なんです。そういう子どもたちが、16.3%でも多いのに、その地域は8割がそういう家庭だ

ということで地域の学校は、21時になっても親が帰ってこないから、「家に帰してもらっても困るんです」と言われて……。そこで、考えたのが通学合宿でした。布団をひいて、泊まって、翌朝は朝ご飯を食べて、子どもたちはランドセルを背負って学校に行きます。ボランティアの大学生たちも、そこから大学に行って、僕らスタッフは後片づけをするというスタイルです。このような取り組みを、貧困支援を専門にしている団体ではなく、今まで子育て支援をやってきた団体が始めたということが、すごく意味のあることだったと思っています。

その後、京都の取り組みは行政にもある程度評価されました。そのため、補助金を受けることができたので、職員を雇い、場所も借りて、今も活動が続けられています。ところが、全国あちこちでこういう話をすると、「こういう団体はすごいけど、うちの地域にはこんな民間団体はありません」と言われるんです。そこで、滋賀県では、ネットワークを作って小さな団体が手を取り合う形で取り組んでいます。例えば、「障害をもったお子さんを日中に見ています」という団体は、夜になると活動は終わりなんですよね。こういうところが、夜の活動だったら場所を貸してくれるし、週1回だったらお手伝いしてくれるという具合です。それから、「チャイルドライン」という子どもたちの電話を受ける団体からも、「空いている日は部屋を使うことができるし、うちのスタッフも行くからできるよ」と言っていました。この滋賀県でのネットワークは、どこの地域にもある社会福祉協議会に間に入ってもらって、みんなが手を繋ぐことができました。先日は、大津市の市長さんも、お忙しい業務の中で活動を見に来られたんです。子どもたち一人ひとりが生き生きしている姿を見て、この活動を広げていかなければということで、応援すると約束をいただきました。

それから、もう一つの新たな取り組みが、高齢者の施設を使って夜の居場所を作ったことです。皆さんもご存知の通り、高齢者の施設は、日中にお年寄りを預かるデイサービスをやっています。利用者の皆さんは、17時頃になったら自宅に帰って、夜はスペースが空いているんです。施設には、食堂もお風呂も揃っています。ご飯は、「10食頼みます」と言ったら出てくるんです。高齢者の施設のご飯は、お年寄り向けのご飯かなと思っていたら、これがおいしくて、私も、子どもたちもすごく楽しみなんです。滋賀県では、高齢者の施設でご飯を食べ、大きなお風呂に入るという仕組みを、今年4月から始めました。まだ半年

しか経っていませんが、いろんな高齢者向け施設が、どんどん手を挙げてくれています。今後も、広がっていきそうです。そして、この取り組みは、子どもだけのためじゃないんです。施設の職員の方が、「幸重さん、子どもが来る金曜日はお年寄りの顔が違うんですよ。認知症で、いつも顔の眉間にシワを寄せているお年寄りが、子どもとしゃべるわけじゃないんだけど、その日は顔が全然違うんです」「子どもの声が施設の中で響くだけでも、子どもがご飯を食べていたり、ワイワイ遊んでいたりする姿を見るだけでも、施設で生活しているお年寄りにとっては、すごい意味があるんです」とおっしゃいます。つまり、お互いにとって、とても意味のあることになっているのです。

もう一つは、最近よく新聞でも報道されていますが、「子ども食堂」という取り組みです。やっぱり、食事なんです。遊んで、勉強して、ご飯を食べるというコンセプトで、地域の健康推進員さんがご飯を作ってくれます。これは特定の子どもたちではなくて、「地域の子どもが誰でも来てもいいよ」という形にしています。みんなで地域の方が作ってくれたご飯を食べるわけです。ゴールデンウィークと夏休みに活動を行ったんですが、子どもたちに、「ご飯はいつも何を食べているの?」と聞いたら、やはりファーストフードを食べて過ごしている子どもが多い。そこで、みんなで食卓を囲んで手作りのご飯を食べると楽しいんです。

八重樫 今、3人の方からお話をいただきました。最初の岩城さんからは、9年前に「イクボス」の理解の元に、イクメンパパの体験をされたということで、「とても良いことがあった」と。特に子どもと一緒に過ごせたという、とても大事な経験をしたということでした。それを踏まえて、「ぜひ皆さんも、お父さんに育児休業を取ってもらってください」というメッセージでした。次に、三好さんからは、新見の公立短大で、大学と地域と行政が協働で色々ミーティングを重ねる中で、「にいみ子育てカレッジ」を立ち上げ、その活動を展開している。これは今どんどん広がってきていることで、その中でも、親子交流広場「にこたん」でどんな活動をしているかということを紹介していただきました。また、新見公立短期大学は保育士を養成しており、そこで学ぶ学生たちが、実際に親子が集う「にこたん」に来て、子育て支援力を育てているということでした。それから、幸重さんからは、地域の中で生活にしんどさを抱えた子どもたちの居場所づくりを、整えられたところでやり始めるのではなく、むしろ、子育て支援をし

ている人たちが、「この子どもたちを何とか支援しないと
いけない」という熱い思いから、幸重さんのようなコー
ディネーターの人たちと協力して立ち上げた、現在進行
中の色々な活動を紹介していただきました。

それでは、ここから、これまで子育てをしてきた体験、
あるいは子育て支援をしてきた体験の中で、特に大事に
していること、あるいは色々な活動を踏まえて、今後こう
いうことが大事じゃないかというところを少しまとめて
話をさせていただこうと思います。それでは、まずは、岩城
さんからよろしくお願いいたします。



両親が対等な立場であたる子育て

岩城 振り返ってみて、私は子育てに対する意識が最も
変わりました。私の家庭の場合、第3子も、上の子2人と同
じように、母親が産休と育休を取って育てても、特に問
題はなかったわけです。それが、3番目の子だけは私が育
休を取ることができた。以前の子育ては母親が主導で、
それを父親がサポートするというカタチが一般的でした。
つまり、我が家の子育ても、メインは母親で、私はサ
ポート的な立場でしかなかったんです。それが、私が育
休を取った時期、我が家は私主導の育児になりました。
先ほどの幸重さんの話にあるように、家庭だけでは子育
てができない。いろんなところで、いろんな団体がサ
ポートしていかなければならない現実が確かにあるん
です。でも、子育ての基本は家庭だと思います。その中
で、母親に任せっきりにするのではなく、やっぱり、両親
ともに関わるべきだと。どっちが主導で、どっちがサ
ポートというのではなく、お互いが対等の立場で子育て
にあたる。そのあたりは、家庭ごとに分担をきちんと決
めていけばいいことだと感じました。

それは、育児だけでなく、家事もそうだと思います。料

理、洗濯、掃除など、我が家の場合も、妻がした方が上手だ
し、テキパキしているんです。それでも、私にできること
はするし、これからも続けていきたいと思っています。古
い考えで、「男が外で働く、女は家庭で家事と育児をする」
という時代もありましたが、今はそうではありません。昔
は、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒にいて面倒も見て
くれる。地域の中でも、よその子と一緒にまとめて面倒を
見てくれるおじちゃんやおばちゃんがいるということ
だったので、今は核家族がほとんどです。地域の
教育力も落ちてしまっている中で、父親が、自分は仕事だ
けして、家事と育児は妻に「お前頼むよ」ということでは
とてもやっていけない。一人目の子どもができて、「そ
んな感じだったら、二人、三人を産むなんて難しい」と
思ってしまうんですね。ということで、意識を変えるこ
とができたのが、私にはとても大きかったです。

社会的に、父親が育児に関わることは随分認められて
きています。しかし、まだまだ一般的ではない。小学校に
上がっても、「子どもが熱を出して、今日は病院へ連れて
行きます」という時は、お母さんが連れて行くことが多い
と思うんです。共働きの家庭でもそうです。参観日にも、
保護者懇談にも、お母さんが行く。家庭訪問だったら、お
母さんが家に対応することが多いと思います。働くお父
さんが、「子どもの参観日だから休む」ということが、普通
に、当たり前になりが受け入れて認めてあげられる雰
囲気を作っていけたらと思っています。

ただ、中学校の現場では増えてきています。参観日に、お
父さんが来る場所も増えている感じです。家庭訪問に
行った時に両親で対応したり、懇談も両親で来る方もい
らっしゃいます。でも、父親だけというのはあまりないで
すね。育休中は、私も出かけて行って、よく聞かれたのが、「お
母さんはどこにいらっしゃるんですか?」と。「いやいや、今
日はこの子と私の二人だけで来ているんです」と言うと、す
ごく褒めてもらえるんです。だいたい、お母さんと子ども、
両親と子どもというパターンが多いんですね。「いやー、
そう。じゃあ、今日はお父さんと一緒に嬉しいね。良かった
ね」と言って、うちの子に話しかけてくれるんですが、「今日
だけでなく、いつもそうです」と内心思っていました。

どの職場でも、仕事はやればキリがないと思うんです。
しかし、そこは割り切って、仕事の量を減らしてでも、子
どもが小さいうちは育児の時間を確保するといったこと
が、思い切ってできるような社会になっていけばいいな
と思っています。

子ども、親、学生の変化

三好 子育てカレッジ「にこたん」のような取り組みをして、「何が見えてきたの?」というところで、少し紹介したいものがあります。

それは、子どもが子育てカレッジ「にこたん」を利用した子ども、その親、そして、そこに関わった学生の変化です。子どもたちと、その親については、簡単なアンケートを行って、実感として親が思っていることをまとめています。

まず、子どもが子育てカレッジ「にこたん」を利用することによって見られる変化です。それは、人と関わることの変化、つまり、「人見知りをしなくなった」、「人が好きになった」、「人と関わろうとするようになった」ということで、人への関心をとても示すようになったという結果が出ています。遊びの中で、友だちと関わることで順番を我慢するといった社会性が育まれていくということでしょう。また、のびのびと遊ぶようになって、「年下の子どもの面倒を見る」というようなことも現れています。それから、「情緒が安定するようになった」ということ。心ですよ。家に帰ってぐずらなくなったりとか、これは、私は子育て支援でとても大事なことだと思っています。広場では楽しくやっていて、その時は楽しいけど、家に帰ったら大変だというのは、本当の子育て支援と言えないと思うのです。それから、「良く寝るようになった」とか、「良く食べるようになった」、「生活の習慣、リズムが非常に良くなった」、「良く遊んだ満足感から、お母さんを探さなくなった」という声もありました。家の中で、「ママ、ここにいて」と常に言っていた子が、自分で遊べるようになったわけです。

次に、親の変化です。「家の中で、子どもとずっと一緒にいるとイライラするが、気分転換になっています」、「相談の場ができ、解決の糸口がもらえて、心が沈む期間が短くなりました」、「行かない時も、行く場所があるという安心感があるので、気持ちが楽になった」という声があります。これは、普段、利用されている姿を通して見えることではありません。こういう心を表現してくれることで、「あ、そういう気持ちでおられたんだな」ということが初めて分かったところです。それから、「親自身が友だちと話ができるようになった」、「積極的に子育て広場等に参加しようと思えるようになった」、「出かける場所ができて、少しやる気になれたような気がする」といった、子育てに対する意欲についてのコメントもありました。先ほど、養育力や教育力という言葉が出ていましたが、育児に

ついて、「聞いたり、真似したりして新しい発見をしています」、「スタッフや他のお母さんとの些細な会話の中で、子育てについて学んで、ヒントをもらっている」といった、子育てをしていく力の向上を感じている方もいらっしゃいます。それから、「常に怒っていたんだけど、成長を見守れるようになった」という回答もありました。

また、父親の育児参加に関してですが、「父親が土曜日に子どもを連れて来るようになって、子守りができるようになった」というコメントがありました。自分だけでは、なかなかできなかった子育ても、広場に行けば何とか過ごせる。やり方が分かるということで、こちらに来て子守りができるようになったことを評価してくれています。「夫婦で『にこたん』を利用することで、夫と共通の知人ができた」ということに喜びを感じている方もいます。「居心地がいいのか、夫が土曜日には進んで『にこたん』に連れて行ってくれるようになった」というコメントもありました。

そして、学生の変化です。まず、「親子への理解が進んだ」、「子どもというのは、知らない人に慣れるまでの時間が一人ひとり違うんだということを実感した」という回答があります。そして、「子どもは親が見守る中で安心して遊び、親はのびのびと遊ぶ子どもの姿を見て安心していった」など、相乗効果というか、双方に働きかける作用があるということにも気付いているようです。

それから、「自分の子どもをどれだけ思っているのか分かる」というコメント。これは、モンスターペアレントといった言葉が飛び交う中で、親がどれほど我が子に対して愛おしく思っているかをリアルに感じ取ったということでしょう。逆に、育児に対する不安を本音で語ってくれた時に、「ああ、そういうことで不安を持つんだなあ」ということを、現実の姿として知っていく機会にもなっているのです。また、保育所実習を経験した学生は、「本当のお母さんになることはできないけれど、本当のお母さんのような大きな愛情を持って接するように努めたいと思った」という感想を述べています。

さらに、広場を開設することの意義についても、「広場は、親にとって、育児の悩みや喜びを一緒に共有できる大切な場である」、「親子を認める周りの人たちの関わりがとても重要だ」など、スタッフや地域の人たちの姿を通して学んでいることを示すコメントがありました。学生にとっては、子どもの成長を知る、喜びを体験できる、貴重な機会と言えます。一般的な保育実習は、最大で20日間

です。でも、ここでは、最大2年間、子どもの育ちを見て、「歩くことができない子が歩くようになった」という瞬間に立ち会い、その喜びをみんなで共有する体験を積むことができます。そして、「子育てはたくさんの人が関わらないとできないということを実感した」というのは、学生スタッフとして加わった学生のコメントです。「にこたん」が行政や地域の機関の協働で運営されていることを現実として目の当たりにするなど、子育て支援への理解が深まったということでしょう。

次に、「にこたん子育てカレッジ」が大切にしてきたことを、三つほど挙げます。

まず、共感的に理解し、受容すること。これは、利用される親子に対してもそうです。しかし、様々な機関の、自分の専門とは異なる分野の人とも協働でやっていく事業ですから、そういう人たちと一緒に力を合わせて取り組んでいくには、相手を共感的に理解しないとなかなか進みません。そして、受容していく、折り合いをつけていくということが大事だと思っています。

それから、親子に対する理解者を増やしていくということ。子どもはこんなにかわいい、こんなに力を持っているということ、親がこんなしんどさをもっている、こんなに頑張っているということを伝えるために、私たちや関わっている人たちが、地域との懸け橋になっていかなければなりません。学生もそうです。これから子育て支援者になっていく学生にも、広場を繋いでいき、理解してもらうことをやっています。

そして、知恵や力を出し合い、支え、育ち合うパートナーの関係です。支援する、支援される、上下ということではなくて、一人ひとりが持つ力を発揮し合える、そういう関係が大事だと思います。まずは、親子、地域の人々、学生が知り合うこと。そして、顔が見える繋がり、これは浅く、より深く繋がっていくために、話し合いを繰り返す。また、支え合うためにはその人の持つ力、自分の苦手なことを知り合って、支え合って、そういう中で育ち合うということが生まれてきます。ただ、焦らず、あきらめず、コツコツと続けることで、いろいろと見えてくるのが、とても大事だと思うのです。

課題としては、「プランターから地域の大地へ」。今、やっている子育て支援というのは、いわば小さなところで植物を育てているようなことでもあります。でも、もっともっと地域の中に、親子が自然と育つ、幸せに生きていく場が育っていけばいいなと。これからの取り

組みは、そこに向けてやっていかなければならないと思っています。

子育て支援の連携を

幸重 二つの活動を紹介します。先ほど紹介したのは、夜の活動です。しんどい家庭にとって、しんどいのは夜と、もう一つは夏休みや冬休み等の長期休暇です。この部分に関しては、地域で「寺子屋プロジェクト」というものを立ち上げて対応しています。



長期休暇になると、宿題が出ます。私も、スクールソーシャルワーカーとして学校を回ると、子どもたちのやってきた宿題が後ろに貼ってあるんです。そうすると、それぞれの家庭状況が一目瞭然で分かります。絵日記の宿題で、「グアムに行きました!」、「台湾に行きました!」とある。その横に、「入院しているおばあちゃんのお見舞いに行きました」。これもいいんですが、夏休みの長い間に楽しい思い出がいっぱいある子は、絵日記にも楽しいことが書けるんですが、そういうことがなくて、唯一行ったお出かけが、おばあちゃんのお見舞いだったという子は、それを一生懸命書いているんです。でも、たくさん貼ってある中で、ちょっと寂しい感じがする日記なんですね。先生たちはよく知っていることで、皆さんも記憶にあると思いますが、自由研究や絵といった夏休みの宿題は親が手伝っているんです。「早よ、やりなさい」と言われながら。それができる家庭とできない家庭とが、大きな差になるんですね。できない家庭の子どもたちを意識して、地域の中で宿題のサポートをしようというのが、この「寺子屋プロジェクト」です。

例えば、お寺を会場に借りてやっています。地域の方たちが、子どもたちの遊びや宿題を見守るんです。また、夏なら、子どもたちは水遊びがしたい。でも、お金が厳しい家庭で水遊びをしていたら、「あんたら、何してんの」と怒

られるわけです。そこで、このお寺では、水やりという名目で水遊びを目いっぱいできるようにしています。子どもたちも、夏休みの宿題をさぼってやらないわけじゃなくて、見てくれる大人がいたら頑張るんです。教えてくれなくてもいいんです。「あ、そやな。解けているな」と言ってくれたら、張り切ってやるんです。また、みんなでスポーツをしたり、自由研究のために地域の工場に見学に行ったり、学生さん呼んで実験教室をやったり……そんな、宿題のネタ作りもやっています。

そして、食事を必ず入れてもらうようにしました。夏休みなど、給食がなくて、お昼ご飯に困っている家庭もあるわけです。そんな家庭の子どもたちは、本当に嬉しそうな顔をして食べます。それから、冬休みは書初めです。今までは、この宿題をせずに学校へ行って、3学期の最初から怒られていたんですよ。これも、地域にいる習字の先生にボランティアを頼んだら、張り切って朱や墨汁を持ってきてくれました。墨汁は100均でも買えますが、そのお金を「ちょうだい」と言いにくい家庭もあるんです。でも、ここに来たらそれも準備されて、好きなだけやって、字も教えてもらえたら、きれいな字が書けるようになりますよね。もしかしたら、展覧会に選ばれたら、「親と一緒に展覧会を見に行こう」という自信にも繋がりますよね。大きな紙に書く習字を経験させてもらうこともあります。この「寺子屋プロジェクト」も、すごく大切なことだと思うのです。

それから、もう一つ、こういう活動をしていると、子どもの身なりが気になります。今の社会、みんなきれいにかわいく、かっこよくしていますよね。そういう中で、キッチンとできない子はいじめられたり、排除されたりするんです。例えば、夜の活動に来て、抱っこをせがまれて抱くんですが、その瞬間にツーンって匂う子がいます。そうすると、周りのみんなからも、「あの子匂うね、汚いね」と言われる。「服も汚い」とか。何とかできないかと色々と考えた結果、街の美容師さんにその話をしたら、ボランティアで、そういう子どもたちの髪を切ってもらえることになりました。これを「ハピハピカット」と名付けました。美容室でお手伝いをちょっとして、その後で髪を切ってもらうんです。

親が忙しくて、美容室に連れて行ってもらえない。また、生活に困っている方からすると、2,000円、3,000円でも美容室のお金は高い。だから、親が散髪するんですが、うまく切れない。でも、街の美容師さんと一緒になっ

て、そういう子どもたちに、そういう場を提供する活動を作ってあげることができました。いろんな工夫、地域の人たちの工夫で、様々なことが解決していけるのです。

今、地域の中で、いろんな子育て支援や取り組みをされていて、すごいなと思います。それはそれで、絶対に大事なことです。私は、今日、異色な話をしたと思うんですが、皆さんに知っておいて欲しいのは、「そこに届かない子どもたちがいるんだよ」ということです。これは子どものせいじゃありません。今日はしゃべりませんが、親にもいろんな事情があります。でも、それを親ができていないからと責めても、その子は、その生活から脱却できるわけじゃありません。汚い身なりをしていることで、からかわれたり、バカにされたりする。宿題ができなくて惨めな思いをして、みんな華やかな思い出がある中で、自分だけが寂しい絵日記しか出せないという子どもたちに、地域の力をちょっと貸すだけで、楽しい夏休みの思い出が作れて、安心して夜を過ごすことができるんです。そういう視点を入れて欲しいですね。

行政が、素晴らしい「子育てハンドブック」を作っています。でも、それをパラパラと見た時に、私が思うのは、私が日頃関わっている親の中には、漢字が読めない方が結構いるということです。母子家庭の調査ではっきりしていますが、今の母子家庭で、1割ぐらいの方が中卒です。ほとんど学校にも行っていない親が多いんですよ。そういう方は、ハンドブックに母子家庭のサービスが載っていても、ふりがなも何も書いていないから分からない。しかも、難しい行政用語で書かれていたら、これを手に取って申請するかというと、しないんです。だから、それを分かりやすいものに作り変えるのではなくて、こういう出会いの場を作って、「こういうのがあるよ」と伝えたら、「その1万円や2万円、助かるわ」と言う方がいっぱいいるはずです。このマニュアルを作って配って、安心するんじゃなくて、地域でこれが届くような人との繋がりを作って欲しいんです。

育休の話も素晴らしくて、ほっこりするんですが、今の社会の中では、半分近い方が非正規雇用です。私たちスクールソーシャルワーカーは、確かに先生と同じ公務員ですが、非常勤なわけですよ。仲間のほとんどは女性で、妊娠すると、皆さん、次の年は仕事なくなるんです。非正規の公務員は、育休を取れません。今、公務員も、非正規を増やそうということになって、それでは女性が頑張って仕事して、男性も育休取ってということができない社

会なんですね。だから、非正規問題を解決しないと、育休の問題もなかなかうまくいかないと思っています。今日は、そういうことを忘れないで欲しいということが、一番伝えなかったことです。

そして、もう一つは、そういう子どもたちの話。子どもたちは全然元気で、かわいそうではないんですよ。すごくいい子で、かわいい子たちなんです。そういう子どもたちが老人ホームに週1回来たら、お年寄りも元気になるんですよ。

私は42歳で、結婚して10年になりますが、残念ながら、子どもに恵まれませんでした。ですから、私はこの夜の活動が楽しいんです。「仕事して、夜の活動に行ってますよね」と言われますが、だって、楽しいんですもん。子どもと一緒に風呂に入って、ご飯食べてね。しょうもない話をして、遊んでね。でも、それで家庭の親は、1日ホッとできるんです。だから、お互いがみんなハッピーでいいじゃないですか。子どものいない私は、子育て的な体験がちょっとできて。でも、貧困家庭は連鎖しやすい環境があります。この間、京都の山科ですと見てきた子が、「お父さんになったんだ」ってやって来たんです。「おめでとう」と思ったんだけど、17歳なんです。京都にも、「にのみ子育てカレッジ」のような場所がいっぱいあります。でも、10代のお母さんやお父さんが、そこに来るか……来ないと思うんですよ。やっぱり、場所を作るだけじゃ、彼らは来られないんです。ですから、そういう子たちのための子育て支援を作ろうかなと、思っているところです。なので、それぞれが別々のところで頑張るんじゃなくて、みんなで手を繋いだら、できることがいっぱいあると思うんです。今日は一つの情報提供だったんですが、一緒にやっていけたらいいなと思っています。

質疑応答

質問者① 三好先生にお伺いします。保育士さんの不足に困っています。昔は職業の中でもトップになるくらい、「保育士さんになりたい」という方が多かったんです。しかし、ここ最近は「なりたい」という意思はあっても、実際に現場に行ったらすぐ辞める、結婚をして辞める場合もありますが、自分が思っていた、描いていた、そういった先生としての立場でなくて苦労していることが多いんだろうと思うわけです。それが実感できないところにギャップがあるのかなと思います。ですので、保育士さんを育てている先生から見て、生徒さんがどういう気持ちで保育

士さんになろうとしているのか、そのあたりを少しお聞かせいただきたいと思います。

三好 保育士になりたい生徒さんは、昔と変わらず多いと思います。私も高校訪問等に行くのですが、看護師さんと同じく、「保育士さんも高い希望がありますよ」と聞きます。一般的に、学生は高校を卒業後、保育士養成課程に入って勉強していきます。その中で、こんなに専門性の高いものだったのかということを改めて知っていく2年間になるのです。そこで、自分に合う、合わないという適性を見ていきながら、8割位は専門職になっていきます。ただ、おっしゃるように、離職率が非常に高い。長続きしない。そこには、現実と自分が描いていたものとのギャップがあるでしょう。適性もあるでしょう。労働環境の問題もあります。そして、『今』を担っていかななくてはならないということがあります。つまり、昔は子ども保育だけでも良かった。しかし、今、子どもたちの事情が、非常に複雑になってきている。保護者の方の問題など、保育士として担っていかなければならないことが複雑になってきているんです。保護者支援や地域に向けての子育て支援もやっていかなくてはならないということで、実際に入ってみると、そういうところでのギャップがあるのかなと思います。養成校でも、保護者支援への対応ということで、子育て支援力をどうつけていくかということも考えています。今の子育て支援の場合は、実習は義務づけられていないんですね。だけど、広場に入って、親子に関わっていく中で勉強していくという体験的な学習も大事じゃないかということで、全国的にも増えていっています。回答になっていないかもしれませんが、やはり、ギャップはあると。長続きしないところは、現場の先生方と一緒に話し合っていないといけないかなと思っています。



質問者② まず一つは、幸重先生にお聞きします。私の周りでも、「トワイライトステイ」を必要とする子どもたち

が見受けられます。これは、社会福祉協議会の事業としてやるのであれば、そこから予算が出るのかなと思うんです。いわゆる、経済的な問題、支援をどういう形で事業発展させているのかということです。それから、岩城先生の方で、意識がかなりできていて、制度も整ってきているのに、男性の育児休業が増えていかないというのは、女性から見ると、昇進の問題が考えられます。その辺の意識の問題として、女性は気が付かないようなところがあれば、お教えいただきたいと思います。ただ制度の問題なのか、環境の問題なのか、それとも、こういうところで男性の意識を変えていくといいんじゃないかということがあれば、教えていただきたいのです。

幸重 「どういうふうに運営しているんですか」というのは、いつも聞かれる話です。この分野に関しては、法制度が整ってきたということがあります。つまり、「子どもの貧困対策推進法」という法律ができて、それを具体的に予算化するための制度が色々作られており、来年はかなり大きなお金がついてスタートしていくでしょう。これから、「トワイライトステイ」みたいなことをしようと思った時に、大きな補助金が出ることになります。その中で、私たちの大きな特徴は、ボランティアが関わっていることです。地域のお兄ちゃん、お姉ちゃん、おっちゃん、おばちゃん…。子どもたちは当たり前の生活がいいのであって、専門性を求めているんですから。ただし、後ろで構えるのは専門家がいるんですよね。その部分の人件費は保証してもらわないと困りますし、場所もタダばかりではありませんので、そこに関しては、「子どもの貧困対策推進法」と「生活困窮者自立支援法」ができあがっているのです。滋賀県では、この枠組みをうまく活用しながらスタートさせています。

ところが、2010年に活動をはじめた頃は、そこまでの法制度が整っていなかったもので、「どうするか」と裏技を考えたんです。最初に商店街の空き店舗で活動したのは、商店街の活性化のお金を引っ張ってくるためでした。普通、商店街の活性化といえば、モデルのお店を作ったりしますが、「商店街はモノを売るのが役割じゃないんです」と。しんどい子どもたちがいるんだから、定食屋さんからご飯を出してもらったり、銭湯に行ったりということを必要なことだと書面に書いたんです。実は来年から、国が商店街の空き店舗を使った子どもの居場所づくりをしようとしています。いい意味でパクられたので、いいんですけどね。だから、しんどい子たちの支援だ

けで考えると、使えるお金は少ないんですが、子育て支援全体や街づくりで考えたら、いろいろとあるんです。あの手、この手で、そこはプロの力だと思うんですが、使っていけることがあるかなと思っています。

もう一つは、市長さんが見に来たという話も含めて、制度を作っている人たちに活動を知ってもらうことです。そこに非常に力を入れたから、京都での取り組みに行政が大きなお金を出し、私も無事に滋賀で展開できたので、このことは意識しないといけないと思います。つまり、制度を作っている議員さんや市長さんを巻き込んでやっていくことが必要なんです。分科会7で、生田さんは「子どもの家」という大阪の取り組みの話をしていると思うんです。いいことをしていても市長さんが「やらない」と決めたら、やらなくなっちゃうんですね。大阪の子どもの家はいい事業でしたが、市長さんのひと言で消えちゃうんです。だから、発信するというのが、もう一つ大事なることかなと思っています。

岩城 男性の育児休業取得率は、まだまだ低いです。政府は、2017年度の目標10%と言っていましたが、現状は3%に満たないと出ていたと思います。私は9年前ですが、取得率はなかなか上がってきません。職場によって、取得できる環境にあるかどうかは、一概に言えないのですが、私の場合は、たまたま中学校の教員という立場で、1年間の育児休業が取りやすかったんです。3か月、半年でも取れますが、年度の途中で休みを取ると、代理の先生を見つけてこないといけないようになります。だから、休みを長期間取らないといけないとなったら、実現が難しい職場もいっぱいあると思うんです。何日かだけとか、それを何回か取るとか、あるいは時短勤務ですよ。『子どもが小さいので、保育園のお迎えに行くから、早く出さしてもらいます』とか『朝の出勤を遅らせてください』という制度もあると聞いています。

先程も言いましたが、母親だけに任せるのではなくて、父親も積極的にできることを探して、ともに子育てするんだという意識を広げてほしいと常々思っています。私の周りの男性で、同じ教員で結婚していて、今度子どもが生まれるという人にも言うんですが、一歩をなかなか踏み出してくれません。「何ともしたいない」と、私は思うんですが。仕事はこれから先ずっとできるけど、子どもが小さいのは本当に限られた期間だけです。苦労もありますが、乳幼児期の限られた時期にしっかり触れ合って一緒に楽しむ感覚で子どもと遊ぶことで、喜び合

えるものも大きいと言えます。子どもとは、小さい頃はよく遊びましたが、高校生の長男と長女は、もう遊んでくれません。「どこか行こうか」と言っても、「もう、いいわ」と。友だちと遊ぶ方が良くなっているんです。ちょっと寂しいのですが、3番目の子だけは一緒に遊んでくれます。きっと後になって、「小さい時にもっとこうしてあげておけば良かった」、「一緒に子育てに関わりたかった」という後悔をすると思うので、皆さんの周りで、小さいお子さんがいるお父さんに、ぜひ声掛けをして欲しいと思います。

それから、復帰後に出世に差し障りがあるかということですね。そんなことを言われたら、育児休業は取れません。でも、それに打ち勝っていかねばならないと思います。私は、何が出世なのかというのがありますけどね。もしかしたら、何を大事にしたいかという価値観の問題でしょう。家庭や子育てを犠牲にしても、仕事で出したいというのも一つの生き方だと思うので、いろんな考えがあっていいかなと思います。



質問者③ 幸重さんに質問をしたいと思います。私は島根県でフリースクール「ステラ」をやっていました。そこに、お金を払えないために来ることができない子どもたちがたくさんいて、滞納の保護者さんが増えたという現状があります。また、高校生を中心にしていますが、通信の高校にも通えない子どもたちもたくさんいます。現在は、お母さん方にコミュニケーションの方法を伝えて各家庭で実施すれば、フリースクールという形を取らなくて良いと考えています。先程のお話を聞いて、胸にジーンとききました。確かに発信していかなくちゃいけないことだと思いますが、先程の質問とも少し被りますが、「トワイライトステイ」や「寺子屋プロジェクト」、合宿等の取り組みをしていくにあたって、何も繋がりが無い私たちが

具体化していくのには、どういったことに取り組んだらいいかを、一歩進んで具体的にお聞きしたいと。また、行政への足掛かりとして、どんな取り組みをしたらいいかを教えていただきたいと思います。

幸重 本当にすごく大事なことだと思います。確かに、議員さんや市長さんが来たと言いましたが、前段階がいろいろとあるわけです。その中の大きいところでは、マスコミとどう繋がるかということです。変な話ですが、「新聞に出ていた」、「テレビで見た」と言うと、議員さん、市長さんは知らないと言うわけにはいきません。

そこで、どうやったらマスコミが来るのかという話です。我々も、かなり振るいにかけて、本当に理解のあるところしか入れないんですが、活動中に来てもらうのは、プライバシーの関係もあってハードルが高いんです。今日もそうですが、報告の場を作ります。イベントを企画して、「こういう問題についてみんなで考えましょう」、「全国的にこんなことやっていますよ」と言って、マスコミを呼ぶんです。我々は、さらにあざといので、そのイベントすらも人権のお金といった行政の補助を使ってやります。そういう流れを、わざと仕掛けていくということをやっています。地域の方も、活動を知ったら何かしたいと思うんですよね。今日の私の話を聞いて、「ちょっとやろうか」という人が出てくれたら、それだけでOKだと思っています。

質問者④ 私はNPO法人で、子育て支援・学童保育・学習支援事業に関わっています。先ほど言われたように、子育て支援では、うちも支援センターに来る親子さんは安心だと思っています。来ない方たちをどうやって、来るようにするのか、私たちが支えてあげられるのかということと、私はとても悩んでいるところです。どうにかして、行政ともタイアップしながら、その人たちに目や心を向けていきたいと思っています。三好先生のところで、もし何か知恵があれば教えていただきたいです。それと、もう1点は幸重さんにお尋ねします。私も、学習支援を、3年間は国の委託事業、補助事業で、今年度からは「国と県が半分ずつ出しましょう」ということでやらせてもらっています。「トワイライトステイ」も、私は本当に必要だと思っています。たくさん子どもがいる中で、家庭的な雰囲気、2、3人と言われましたが、どういう振るいにかけているのかということをもう少しお聞きしたいと思っています。

三好 来る人はいいい。でも、来ない人の支援が難しい。こ

れは、ずっとうちの課題でもありました。それで、どういうふうにして繋がっていけばいいかということです。現在、うちは「アウトリーチ」に取り組んでいて、具体的には、産科で、子どもを産む前の人たちに知ってもらおうという活動です。田舎ですから、産科は一つしかないんです。そこに、うちのスタッフが出向いて行くということを積極的にやっています。そうして、顔見知りになっていくのです。でも産科の助産師さんからは、「産む人は産むことに精一杯で、その先のことは考えていない。だから、来ても無駄だよ」と言われました。でも、頭の隅っこに、「ああいうところがあったな」ということを、しんどい時にちょっとでも思い出してもらえたらと思い、コンスタントに続けています。その成果からか、保健師さんからは「まだ出ていい時期じゃないのよ」と言われるような、子どもが1か月、2か月の時に、しんどくなって来る方もいます。それから、検診は必ず行くということで、3、4か月の早い時期の検診にスタッフが行って、顔を直接見せるということで繋がっていく。それは非常に効果を見せ、そういう方たちも来るようになりました。

もう一つは、子育て広場の出張広場を商店の中でやり始めたということです。お店の中で、不特定多数の人たちに見える場所になります。実際にやってみると、とても良いことだったので、これからも続けていく予定です。ふらっと来られる場に、とにかく出ていく。そこでは、高齢者の方たちやいろんな方に見ていただく、知っていただく。もっともっと身近になっていくように、こちらが出向いていく。繋がっていく努力をしないと、ただ待っている、そこでは勇気を持って来られる人しか繋がれません。今は、どの場に行けばいいかということをしっかり探りながらやっています。

幸重 どういう形でやっていくのかという話ですが、大きく二つの入口、ルートを持っています。困難な家庭に関しては、学校や福祉、保育園とかの専門機関は知っているんです。ただし、一方で守秘義務がありますので、おいそれと繋ぐのは難しいんですね。だから、一つは、「守秘義務を守って、こういう人間が家庭の情報をキチッと管理をします」という専門家を、繋ぐところに置くということが大切です。でも、現場は、ボランティアの地域の方たちですよという打ち出しになります。キーとして、学校で働くソーシャルワーカー、スクールソーシャルワーカー、社協で働くコミュニティソーシャルワーカーなど、生活保護や生活困窮等を担当しているケースワーカーという方

ちはみんな知っているんです。それは外に情報を出せないだけです。それを管理できるシステムを作っておくというのが、一つのルートです。

もう一つは、地域の力。地域の中に、寺子屋や食堂といった「誰でも来られますよ」という場を作って、そこに来る子どもを見ると、「あれ、おかしいな」と、たまに気づく時があるんです。そういう子に、「毎週ここでやってるから、どうや」と声をかけることでもラインができると思うんです。地域の中で発見していく仕組みと、専門機関と繋がる仕組みの両輪になると、かなりの確率でいけると思います。

実は、人数の規模感もすごく大事にしています。分科会7で紹介されていると思うんですが、西成では「子どもの家」という取り組みをやっています。私も話を聞いてすごいと思いましたし、現地へも行きましたが、とても真似できない規模です。他の地域じゃできません。私は、それはしたくない。皆さんが、ちょっとやろうかなという規模感。先ほどの家庭的な雰囲気の中だと、週に1回だったらできるかなと思っています。例えば、子どもたちが歩いて来られるような学区に、「子ども食堂」とか、夏休みにやっている「寺子屋プロジェクト」とか、夜の「トワイライトステイ」の場ができるといいなと思います。子育て支援も同じで、最初は、そんなにたくさんなかったんです。でも、これだけ広がったわけですから、同じようにできます。もとも「こどものひろば」の基盤になっている子ども劇場、親子劇場は、福岡で始まった、小さな活動だったんですから。私もできると思っていますので、ぜひ一緒に作っていきましょう。



暮らしを守る個別支援と顔の見える繋がり

八重樫 今日は、最初の趣旨のところでもお話ししましたように、子育て支援というと、ともすると、就学前の子

どもや子育て家庭の支援、その中でも特に、お母さん方を中心にした子育て支援に焦点が当たりがちです。もちろん、それも大事なんですが。今日は少し幅を広げて、いろんな側面から見ていきたいという思いがあり、いろいろな方にお話しいただきました。

岩城さんからは、育児休業を取られたお話でした。お父さん、父親が子育てに参画するという。この参画という言葉が大事で、参加するという単なるサポートではなくて、母親と同等に、対等に、一緒に子育てをするということですね。責任も喜びも楽しみも一緒に子育てをするという、この参画がとても大事なんです。でも、特別なことではなく、当たり前になるようになるためには、皆さん方の色々な声掛けだとか、そういうこともひっくるめて、もちろん、行政にも男女共同参画をしっかりと進めたいということもありますが、まずは身近な人から、「お父さんが子育てに参加するのはとてもいいんだよ」ということを伝えていただけたらと思います。それが、大きな一つの課題でした。

三好さんからは、「にこたん」の取り組みによって、子どもも親も変化し、たくさんの効果が上がっているという報告がありました。そして、学生も、とても変わってきたということです。こちらでは、実際に保育士を養成されているので、子育て支援と保護者支援という視点をもった保育士をしっかりと育てていくことも、とても大事じゃないかと報告していただきました。

幸重さんからは、就学前の子どもや子育て家庭だけではなく、小学生も中学生も高校生も、そういう子どもたちも対象に、さらにその中でも、生活にしんどさを抱えている子どもたちや子育て家庭も対象にしていく。産科から、生まれる前から切れ目のない子育て支援がとても大事で、それを、地域の人たちを巻き込みながら進めていくことが、とても大事じゃないかという報告をしていただきました。

そういうことを踏まえて、二つ大事なことがあると思いました。これは、地域福祉でもよく言われていることで、皆さんも良くご承知だとは思いますが、まず一つは、子どもや子育て家庭に、しっかりと個別に、例えば、1対1で向き合うこと。先ほど、家庭的で小規模での関わりができると言われたように、個別にしっかりと寄り添っていくということ。そして、子どもや子育て家庭がどんなことに困っているのか、困っていなくても一緒に楽しんで遊ぶということもひっくるめて、しっかりと関わりなが

ら、ありのままを受け入れて、悲しいことは一緒に悲しみ、楽しいことも一緒に楽しむという共感を通して、一人ひとりの大変さを少しでも軽くしていく。そういう個別支援によって、一人ひとりの子どもや家庭の暮らしを守ることがとても大事だということです。

そして二つ目は、家庭のお父さん、お母さんはもちろんですが、保育者や学校の関係者の人たち、社会福祉協議会等、そういう地域の専門家と言われる人たち、幸重さんはスクールソーシャルワーカーとして活動されていますが、そういう専門職、あるいは職場も巻き込んだりしていく。そして、行政も地域の人たちも一緒になって、形だけの組織ではなくて、一緒に話し合っ、腹を割って話し合えるような、そういう顔の見える繋がりを地域の中に作り出していく。そういう意味では、中学校区よりも小学校区、さらにもっと小さい単位で、顔の見える繋がりをしっかりと作っていく。皆さんは地域の中でいろいろと活動をされていると思うんですが、皆さんが最初の目になって、少しずつ周りの人を巻き込みながら、地域の繋がりを作ってくれたらありがたいと思っています。今日の皆さんのお話を通して、それから、フロアからの質問でも色々ありましたことを踏まえて、この二つにまとめられるんじゃないかと思います。

暮らしを守る個別支援と、地域のコミュニティづくりというか繋がりが、両方うまく働き合うことによって、子どもや子育て、家庭が安心して暮らせる地域ができていくのではないかなと思いました。皆さんの一人ひとりの力がとても大事になってきますので、地域に戻られた皆さんが、子育て支援をしっかりと頑張っていただけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。

